

指導資料



鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第166号

一小、中、高、特別支援学校対象一

平成24年4月発行

特別な教育的ニーズのある児童生徒の 学び方の特徴を生かす指導・支援の在り方

休み時間に友達と一緒に過ごすことは好むが、授業におけるグループ学習では、ほとんど発言をせず、意欲的に学習に取り組めない児童生徒がいる。このような児童生徒のつまずきの要因の一つには、児童生徒の「学び方」が関連していると考えられる。

そこで、本稿では、児童生徒の学び方の特徴を理解するとともに、その特徴を生かす指導・支援の在り方について述べる。

1 学び方の特徴の理解と指導・支援

(1) 「多重知能理論」を参考にした学び方の特徴の理解

児童生徒の学習上のつまずきは、児童生徒がもつ記憶や思考など、認知の特性等による場合が少なくない。認知の特性等を把握する方法には、心理検査があるが、検査の実施やその結果の解釈には専門的な知識等が必要であり、多くの教師にとっては、専門家の協力がなければ実際に活用することは困難である。そこで、日頃の学習の様子を観察し、児童生徒が得意だったり、好んだりする活動から得意な学び方を、また、不得意だったり、好まなかったりする活動から不得意な学び方を把握しながら、児童生徒の学び方の特徴を理解することが大切になる。

このように、児童生徒の学び方の特徴

を理解しようとするとき、ガードナー(1999)の「多重知能理論(Multiple Intelligences)」が参考になる。ガードナーは、「Intelligences(知能)」という言葉をあえて使うことで、知能の概念を幅広く捉え直すことを提唱した。つまり、人間の知能は一つではなく、次のような八つの知能があり、それらが統合されたものが、一人の人間の知能として働いているという考え方である。

- ① 言語的知能
言葉を効果的に使いこなす能力
- ② 論理数学的知能
問題を論理的に分析したり、数学的な操作を実行したりする能力
- ③ 音楽的知能
音楽を作り出したり、表現したりする能力
- ④ 身体運動的知能
自分の考えや感情を身体全体や身体の部分を使って表現する能力
- ⑤ 空間的知能
空間を認知して操作する能力
- ⑥ 対人的知能
他者の感情や意図を認識して、関係をつくる能力
- ⑦ 内省的知能
自分自身の感情や意図、動機を認識し、それらを踏まえて行動する能力
- ⑧ 博物的知能
自分の周りにある様々な種類の植物や動物などを見分けて分類する能力

このような考え方を踏まえると、児童生徒は多様な「知能(能力)」をもっており、それらのバランスが一人一人異なることによって、それぞれの得意な学び方や不得意な学び方が起こると理解することができる。また、

児童生徒は多様な「知能」をもつと考えることで、児童生徒の日頃の学習の様子から、得意な学び方や成長の可能性などについて幅広く理解することもできる。

そのような児童生徒の学び方の特徴を理解するためには、次に示す表を参考にして児童生徒の様子を観察し、児童生徒が得意としている活動などから、得意な学び方を捉えることから始めることが大切である。

表 得意な学び方を捉える視点

学び方	得意な活動・好きな活動の例
「言葉」 (言語的知能)	・ 本を読む。 ・ 文章を書く。 ・ 自分の考えを人に話す。 ・ 人の話を聞く。 ・ 言葉で覚えたり、考えたりする。 (国語や英語などとの関連が大きい。)
「数・考える」 (論理的知能)	・ 計算をする。 ・ 物事の仕組みや法則を探る。 ・ 目的をもって計画的に行動する。 ・ パズルやカードゲームをする。 (算数・数学、理科などとの関連が大きい。)
「歌・リズム」 (音楽的知能)	・ 歌う。 ・ 音楽を聴く。 ・ 楽器を演奏する。 ・ 音楽に合わせて、身体でリズムをとる。 (音楽などとの関連が大きい。)
「身体」 (身体運動的知能)	・ 運動をする。 ・ 工作をする。 ・ 体験活動をする。 ・ 料理をする。 ・ 具体物を操作する。 (体育などとの関連が大きい。)
「絵・見る」 (空間的知能)	・ 絵や図をかく。 ・ 物を組み立てる。 ・ 物を上下左右から見たときの形をイメージする。 (図画工作・美術、地理などとの関連が大きい。)
「対人的」 (対人的知能)	・ 友達をつくる。 ・ 友達と一緒に学習する。 ・ 同好会、クラブ活動をする。 ・ 地域行事に参加する。 (道徳、特別活動などとの関連が大きい。)
「振り返り」 (内省的知能)	・ 自分自身について考える。 ・ 日記を書く。 ・ 自分が興味をもっていることについて調べる。 (道徳、特別活動などとの関連が大きい。)
「自然」 (自然的知能)	・ 自然観察をする。 ・ 自然にある物を集める。 ・ 動物を飼ったり、植物を育てたりする。 (生活、理科などとの関連が大きい。)

(2) 学び方の特徴を踏まえた指導・支援

特別な教育的ニーズのある児童生徒にとって、自分の得意な学び方を十分に生かすことができる学習活動がないと、学習に取り組むことが難しかったり、学習に対する興味・関心や意欲を失ってしまったりすることが起こる。そこで、児童生徒の学び方の特徴に応じた学習活動を設定し、児童生徒の得意な学び方を生かしたり、不得意な学び方を補ったりするような手立てを工夫することが大切になる。

例えば、漢字やアルファベットを覚えることなど、言葉に関する学習は不得意であるが、歌を歌ったり、身体を動かしたりする活動を好む児童生徒に対しては、次のような手立てが考えられる。

- ア 「歌・リズム」を生かす。

 - ・ 漢字を書く際に、「すー」、「さっ」、「てん」など擬音的な言葉を使いながら、リズムに合わせて書く。
 - ・ アルファベットの順番を覚える際に、「A B Cの歌」で覚える。

イ 「身体」を生かす。

 - ・ 漢字を覚える際に、ノートに書くだけではなく、身体全体を使って空書をしたり、毛筆で大きく書いたりして覚える。
 - ・ アルファベットを覚える際に、身体でアルファベットの形をまねたり、粘土で文字の形を作ったりして覚える。

また、自分の考えを伝えることが不得意な児童生徒に対しては、不得意な「言葉」を補う次のような手立てが考えられる。

- ・ 児童生徒が伝えたい内容を事前に聞き取り、練習させたり、発表のメモを準備させたりする。
 - ・ 発表話型のカードを参考にしながら、発表させる。
 - ・ 周りの児童生徒に、絵や図を併せて示しながら、発表させる。
 - ・ 周りの児童生徒が発表内容を理解できるように、教師が補足したり、繰り返したりして伝える。

このように、児童生徒の得意な学び方を生かしたり、不得意な学び方に配慮したりすることで、学習に対する興味・関心や意欲を児童生徒がもてるようにすることが大切である。

2 学び方の特徴を学ぶ指導・支援の工夫

特別な教育的ニーズのある児童生徒は、自分にとって得意な学び方を経験し、理解しても、新しい課題において、得意な学び方を選択し、活用することが難しいことがある。そこで、自分の学び方の特徴を学ぶ指導・支援の工夫が必要になる。そのためには、児童生徒の自己理解や課題解決に関する発達の道筋を踏まえて、発達の段階に応じた指導・支援の工夫をすることが大切である。

(1) 発達の段階を踏まえた学び方の指導・支援

小学校低学年の児童の多くは、自分の行動や考えを客観的に捉える力が十分に発達していないため、課題に応じて自分の得意な学び方を適切に選択することが難しい。そこで、低学年の段階では、教師が把握した、児童の得意な学習活動を設定して、できるだけ多くの成功体験を味わわせるようにし、「できた」、「分かった」という実感をもてるようにすることが大切である。このときの実感が、将来の新しい課題や不得意な課題を解決するときの意欲につながるからである。

さらに、9歳から10歳以降、自分の行動や考えを客観的に捉える力が発達してくると、課題に応じて自分の得意な学び方を適切に選択することができるようになってくる。そこで、小学校中学年から中学校においては、児童生徒が自分の行動や考えを振り返ることができるような働き掛けをすることが大切である。

(2) 学び方への気づきを促す指導・支援

特別な教育的ニーズのある児童生徒の中には、自分の行動や考えを振り返る力

の発達が十分でなく、自分がどのようにして課題を解決したのか、体験しただけでは十分理解することが難しい場合がある。そのような児童生徒に対しては、課題解決の過程を丁寧に言葉で説明したり、一緒に振り返ったりしながら、伝える必要がある。このようにして、児童生徒自身が自分の課題解決の過程を振り返り、説明できるようにしていく必要がある。

さらに、ペア学習やグループ学習など、対人的知能を生かして、友達と交流しながら学習する楽しさを経験することも大切である。このような学習は、他者理解を通して自己理解を図るために大切な活動であるとともに、児童生徒の社会性を育んだり、学習に対する意欲を高めたりといった側面をもっている。

具体的な指導・支援の方法として、次のようなものがある。

【教師の言葉掛けやモデルの提示】

- ・ 児童生徒の得意な学び方を、教師が実際にやってみせる。その際、その学び方を言葉で明確に伝えるようにする。
- ・ 実際に児童生徒に学び方を体験させながら、その有効性について言葉で説明する。

【学習の振り返り】

- ・ 授業の中で分かったことや難しかったことを振り返る時間を設ける。
- ・ チェック式の振り返りシートを準備し、学習の過程を踏まえながら、どの段階で自分の学び方を生かしていけばいいのか捉えさせる。
- ・ 児童生徒に、どのような学び方で課題に取り組んだのか説明させながら、その段階ごとに簡潔にまとめさせる。

【ペア学習・グループ学習】

- ・ 自分の考えや解き方を友達に説明することで、学び方を振り返らせる。
- ・ 友達の考えや解き方を聞くことで、いろいろな学び方があることに気付かせるとともに、相対的に自分に合った学び方があることに気付かせる。

このような方法で、自分の得意な学び方とともに不得意な学び方についても気付かせることが大切である。そして、自分のよさを生

かしながら努力する態度を身に付けさせるだけではなく、どうしても不得意なことについては、援助を求めるという手段があることにも気付かせるようにしていく。

(3) 多様な学び方を認め合える学級づくり

特別な教育的ニーズのある児童生徒が自分の得意な学び方を生かすためには、周りの児童生徒に対しても、多様な学び方があることに気付かせ、お互いの多様性を認め合えるような学級づくりをすることが大切である。

このとき、教師は、児童生徒の学び方に対する教師の理解の在り方や指導の姿勢が、周りの児童生徒に大きく影響することに留意し、「児童生徒一人一人の存在を受容し、児童生徒の思いに共感する」カウンセリングマインドをもち、周りの児童生徒のモデルとなることが大切である。

3 実践例

次の実践例は、小学校6年生の算数科「倍と割合」における取組である。

(1) 特別な教育的ニーズのある児童の学び方

児童の日頃の学習の様子から、次のような学び方があると捉えた。

- ・ 論理的に考えることは不得意であるが、絵や図を見たり、具体物进行操作したりすると理解しやすい。
- ・ 算数に対する苦手意識が強い。

(2) 児童の学び方の特徴を生かす工夫

特別な教育的ニーズのある児童だけではなく、周りの児童の様々な学び方にも応じることができるよう、ワークシートやヒントカードなどをできるだけ多く

準備するとともに、自分に合った教材を自由に選ぶことをお互いが認め合えるような雰囲気をつくるようにした。

【ワークシートの工夫】

- ・ 自分の考えをまとめる際に、穴埋め式と枠のみの2種類のワークシートを準備して、児童に選ばせる。
- ・ 練習問題では、難易度の異なる3種類のワークシートを準備して、児童に選ばせる。

【ヒントカードの工夫】

- ・ ヒントコーナーに2種類のヒントカードを置いて、自由に見ることができるようにする。
 - ① 割合の公式が書かれた1枚のカード
 - ② 図と絵を添えて視覚的に分かりやすくした5枚のカードを順番に見ることができるようにリングで綴じたもの（「紙芝居カード」）

(3) 自分の得意な学び方を学ぶ取組

授業の終末において「ふりかえりカード」を活用し、児童が自分の得意な学び方に気付くことができるようにした。

【ふりかえりカードの活用】

- ・ 自分が使ったヒントや自分のよかったところ、友達のよかったところについて振り返らせる。
- ・ 教師が、ふりかえりカードにコメントを書いたり、よかったことを言葉で伝えたりする。

以上、児童生徒の学び方の特徴を生かす指導・支援の在り方について述べてきた。各学校での充実した取組を期待したい。

－ 参考文献 －

- 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』2009、海文堂出版
 - 文部科学省『生徒指導提要』2010
 - 永江誠司著『教育と脳』2008、北大路書房
 - 三宮真智子著『メタ認知』2008、北大路書房
- (特別支援教育研修課)